

もうひとつの イリスストーリー

-La première histoire-



PONZA



introduction

少女の頭に触れる暖かな手のぬくもり。少女が見上げると、そこには顔をくしゃくしゃにして泣きそうになりながら笑っている彼女の母親の姿があった。

「イリス——我が娘よ。あなたがデル族最後の希望なの。この世界を魔王の手から必ず救ってくれることを信じていますよ」

その言葉は、少女が理解するにはまだ早過ぎる言葉だったが、少女は母親が自分に何かを期待してくれていることだけを感じ取り、元気よくうなづいてみせた。

「それと……イリス。これは大切なモノだから、絶対に無くしちゃダメよ？」

「なくしちゃうとどうなるの？」

母親は少女にもわかってもらえるようにどう説明しようかと数瞬の間悩み、そして……。

「これをなくしちゃうと、おばあちゃんやイリスの大事なお友達とかがみんななくなっちゃうの」

「えっ、そんなのイヤだ！」

少女は母親から託されたサファイアがはめ込まれたペンダントを握りしめて、母親に「絶対なくさないよ！」と誓った。

目尻に浮かぶ涙を拭った彼女の母親は、小さな声で「元気でね」と呟くと、彼女の側にいたバルトにうなづいて見せました。

「行って……バルト。祖母と娘をお願いします」

「……わかりました。……………あ……あの」

「どうしました？ バルト」

何かを言いたそうに口ごもってしまうバルトをイリスの母親は不思議に思い、彼の顔を見て絶句しました。

「あなたたちに……こんなことを押し……付けてしまっ……て……ずみ……ば……ぜん」

バルトは泣いていた。一度流れた涙を止めることはできず、子供のように泣き出すバルトをイリスの母親はそっと抱きしめた。

「いいのよ、バルト。これはわたしたちデル族の使命だから。だからあなたはあなたの使命を、イリスを育てるという使命を遂行して。ありがとうバルト……あなたが私の代わりに泣いてくれたから、これで心残りはないわ」

「おかあさん、またどこかにいくの？」

二人のやりとりを側で眺めていたイリスは母親がどこかに行くのであろうことを感じ取りました。

「お母さんは悪い妖怪をやっつけにいつてくるの。だからイリスはいい子にして待っていてね」

「うん！ わかった！」

「バルトおじちゃんやマリ又おばあちゃんの言う事をよく聞いて待っていてね」

「はあ〜い。おかあさんいつてらっしゃい！」

その言葉が出発の合図となった。彼女の母親は最愛の娘に背を向けると、結局一度も振り返らずにベロスを後にした。なぜ彼女はアガシュラと戦わなければならないのか。それは、彼女たち

がデル族だからなのです。デル族はみな、何かしらの能力を秘めた一族で、戦闘に秀でた能力も持つものもいれば、一般生活にしか役に立たないような能力を持つものもいました。彼女たちデル族は、その能力を使って他の種族たちと共存し、遠い昔から崇められてきました。しかし、そんな彼女たちの能力を疎ましく思う存在がいたのです。

それが——魔王ビースト。

魔王は世界を手に入れようと画策していましたが、デル族に阻まれて思うようにいきませんでした。やがて魔王は、妖怪アガシュラを生み出し、デル族と戦わせました。何年にも渡る長き戦いの末、魔王はデル族に打ち勝ちました。デル族という支えを失った他の種族たちも大半がアガシュラの餌食となってしまいました。人々が深い絶望に陥る中、イリスの母だけは希望を失いませんでした。彼女は自らの力の一部をサファイアのペンダントに宿して、娘にこの世界の希望を託したのです。

Cache-cache

イリスの母親たち一行が旅立ってから、かなりの時が流れました。一時的とはいえアガシュラたちの脅威がベロスから去り、人々も徐々に増え始め、街もまた、元の明るい風景が戻ってきました。バルトは彼女と交わした最後の約束を守るべく、たくさんの愛情をイリスに注ぎました。

イリスは、祖母のマリヌやベロスの町みんなのおかげもあって、礼儀正しい元気な子に育っていきました。彼女の母親がベロスを旅立って数年が経ち、イリスが学校に行きはじめてからさらに数年が経つと、ムーウェンという男の子と知り合い、彼とよく遊ぶようになっていきました。

ムーウェンはイリスより2つ年下ではあったけれど、彼はイリスよりもたくさんの知識を持っていました。彼の口から出る情報はいつもイリスを驚かせ、イリスは物知りな彼の話聞くために、彼といつも一緒にいました。そのせいなのか、彼とよく遊ぶようになっていったのです。

「ねえムーウェン、今日はどんなことをおしえてくれるの？」

「よし、今日はアガシュラについておしえてあげよう」

「わーい！ おしえておしえて～」

「いいかい？ アガシュラっていうのはね、まおうってやつがつくりだした悪いやつらなんだ」

「……うんうん、それでそれで？」

「そいつらのせいでデル族っていう人たちがみんな死んじゃったらしいんだよ」

「デルぞくの人たちかわいそう……」

「だからアガシュラに会ったらがんばって逃げないとしんじょうんだぞ」

「わかった！ アガシュラに会ったらがんばってにげるね！ それよりさっ、今日はなにしてあそぼっか」

確かにムーウェンという少年は色々なことを知っていました。しかしそれがどれほど危険なことか少年には分かっていませんでした。そんなある日のこと――。

いつものように二人は町はずれの森まで遊びに行っていました。この森は、ベロス付近にある森の中では一際大きな森で、小さな山と言っても過言ではないくらいの起伏にも富んだ森でした。今日はかくれんぼ。いつもみつかってばかりのイリスは、今日こそ制限時間まで見つからないぞと意気込み、森の奥深くまで隠れに行きました。

やがて、かくれんぼが始まって、すぐに見つかるだろうと思っていたムーウェンも、今日だけはイリスを見つけられずにいました。制限時間が過ぎて、陽が傾いていったあともムーウェンはイリスをみつけることができませんでした。

「おーいイリス～。僕の負けだから出ておいでー」

ムーウェンが負けを宣言したことによって、かくれんぼに決着がつきました。イリスはついに彼に勝つことが出来たのです。しかし彼の言葉は、イリス自身には届いていませんでした。彼がいた場所よりもさらに奥深くに隠れていたため、イリスには彼の声を聞くことができなかったのです。しばらくしてもイリスが出てこない事を不安に思ったのか、ムーウェンはイリスが森で迷子になったのだと思い、ベロスに戻り大人を呼んでくることにしました。

「ムーウェン、遅いなあ……」

一方、森の奥深くにいるイリスも、陽が傾いても姿を見せないムーウェンの事が心配になってきました。そこで、ちょっとだけ戻って彼を驚かせてやろうと思い、動こうとしたその時でした――。

「あれ……わたし、どっちからきたっけ？」

日が傾き始め、森の中には夜の帳が降り始めていたことに、かくれんぼに夢中だったイリスは気が付きませんでした。右を向いても左を向いても同じような景色の中、次第に心細くなったイリスはついに泣き出してしまいました。

「……ぐすっ、むーうえーん。どこおー？」

右も左もわからないまま泣きながら歩いてムーウェンを呼びつづける彼女に、程なくして幸運が舞い降りました。彼女が歩いている前の方から草木を掻き分ける音がしたのです。そしてそれが次第に大きくなって、こちらへ近付いているのがわかりました。イリスは泣いていたことを隠して、先程まで考えていた、ムーウェンを驚かすという考えを実行するべく、近くの木に背中を張りつけて様子を伺いました。彼がそろそろ出て来ると思ったとき、草木をかき分けて現れたのは、一匹の動物とそれを追いかける人のような蛇のような生き物でした。逃げていた動物は、彼女の側で追いかけていた生物に捕まり、体を噛みちぎられ、生きたまま食べられてしまいました。あたり一面に犠牲となった動物の血が飛び散りビクンビクンと食べられた動物は痙攣し、やがて動かなくなりました。その光景を彼女は間近で見てしまい、あまりの凄惨さに彼女は「ひっ！」と驚きの声を漏らしてしまいました。彼女はふいに思いだしたのです、今動物を食べている生物が何者なのかを。

(いいかいイリス。アガシュラは蛇のような下半身と人間の上半身を持っているんだよ。)

(だからアガシュラに会ったらがんばって逃げないとしんじょうんだぞ)

彼女は彼の言葉の意味を真に理解しました。このままだと、目の前の動物みたいに自分も生きたまま食べられてしまうんだと彼女は直感したのです。だってほら、もう目が合ってしまったんだもの。目の前にいる残酷な生物と――。

じりじりと後ずさるイリス。目の前のアガシュラは獲物を見つけた喜びなのか、イリスには理解不能な言葉を発しながらじわじわとイリスに迫ってくる。恐怖心が一周して元に戻ったのか、少しだけ落ち着いたイリスは覚悟を決めると、その小さな足に己の生死を賭けて、目の前のアガシュラから遠ざかる。アガシュラは逃げる獲物を見てにやりと不敵な笑みを浮かべる。それは勝利を確信した時の笑みなのか。それとも新たな獲物を捕まえることができる喜びなのか。アガシュラは先程まで食べていた獲物を素早く食べ終えると、森の中へと消え去ろうとしている少女に目標を定め、ぬるりと這うように追跡を開始した。

森の中をがむしゃらに走る小さき者とそれを追う大きな邪悪。小さき者はただひたすらに草木をかき分け、迫り来る邪悪から逃げる。どこへ逃げればいいのかもわからずにただ闇雲に走る。草を踏みしめ、木をくぐり抜け、獣道をひた走る。その小さな体からは想像もできないスピードで森を駆ける。だが……何事にも限界という超えられぬ壁があるように、小さき者が描く逃走劇にも終わりは来る。人は何かに集中すると何かが疎かになりがちな生物である。彼女もまたその法則からはみ出ることは出来なかった。目の前の障害になりそうなものをすべてなぎ払っていく少女は、しかし、地面から顔を出す障害物には気づくことが出来なかった。獣道が故に起こってしまった出来事。それは、そこらに転がっているものよりも少しだけ大きな石だった。いつもの彼女なら、当たり前のように転ぶことなくむしろ、踏みつけていくくらいの大きさでしかないその石に少女はつまずいて転倒してしまった。

体が重力の支配から解き放たれる一瞬の浮遊感。そして……少女の体は再び重力に従い、地面に激突する。

彼女自身がつまずいてしまった事を理解した瞬間には、彼女の小さな体は既に地面に叩きつけられていた。

「——っ！」

衝撃に思わず眼を閉じて、すべての感覚がその痛みに耐えるように働いた。しかし、それも束の間、思考回路はすぐに今が非常事態であることを告げなおす。

「に、にげなきゃ！」

しかし、彼女が石につまずき、体勢を立て直すまでのわずか数秒にも満たなかったその時間は、アガシュラが彼女へ追いつくには十分すぎる時間だった。

「……ひっ！」

立ち上がろうとした彼女の目の前には、アガシュラがすでに舌なめずりをしながら不敵な笑みを浮かべている。少女の目の前に立っているアガシュラは思っただろう。これでまた獲物を仕留められたのだと。少女は思っただろう。死ぬのはイヤ、死にたくない……と。アガシュラはゆっくりと目の前で怯えている少女に近づき、その口を大きく開け、少女に、まだ世界を知り始めたばかりの無垢な少女に、残酷な死の運命を……与えた。

「……ぎっ……ひっ……ぎあああ」

少女の口から恐怖とも悲鳴とも取れないような言葉が漏れる。首筋にめり込んだアガシュラの牙は少女の柔らかな皮膚を食い破り、鮮血をあたりにまき散らした。少女の体が痙攣してビクン

ビクンと反応し、少女の目からは次第に光がなくなっていく。

(む……………え……ん……ご……め……さい)

薄れゆく意識の中、少女は親友に永遠の別れを告げようとしていた。アガシュラがさらに少女の体を食い尽くそうと、少女の首筋にあるペンダントを食いちぎろうとした時のことだった。

突然、ペンダントが一際まばゆい光を放ち、あたり一面を包み込んだ。その光は、夜の帳が降り始めた森の中をもう一度昼間に戻すかのようなまばゆい光だった。

「バルトおじさん！ 今の光って」

「ムーウエンも気づいたか、おそらくイリス嬢ちゃんがいるかもしれん。急いでいってみよう」

「うん！」

その光は、近くまで来ていたムーウエンとバルトに彼女の居場所を知らせるのには十分すぎる光量だった。

「イリス、どこだー！ イリス嬢ちゃん！」

「……あっ！ バルトおじさんあそこ！」

光が収まった後、そこには立ったまま微動だにしないイリスの姿があった。

「おーい！ イリ……」

「待つんだ！ ムーウエン！」

ムーウエンがイリスに駆け寄ろうとした瞬間、バルトがそれを左腕で遮った。

「なんでだよ、バルトおじさん！」

「イリス嬢ちゃんの目の前にいる生物をよく見てみなさい」

「え？ あ！ あ……あれってもしかして」

「ああ、なぜこんなところに出たのかは不明だが、間違いない。アガシュラだ。ムーウエンは下がっていなさい」

そう言うやいなや、ムーウエンの前に進み出て、彼をかばう形でアガシュラと対峙しようとするバルト。だが、対峙しようとするには何か違和感を彼は感じていた。彼がアガシュラを注視すると、アガシュラはこっちにまったく目もくれず、ただイリスの様子をじっと伺っていた。そして彼がイリスを見たとき、驚くべきものを彼は目にしてしまった。

それは、イリスの手に握られている白銀に輝く一張りの弓。どこから出現したのか虚ろな目でそれを握る少女と、彼女の豹変ぶりに警戒心をあらわにするアガシュラという構図が出来上がっており、バルトは戦いに割り込むことが出来ずにいた。両者の間に流れる沈黙の間。アガシュラは、豹変した少女の行動を注意深く観察するため、じっと少女を見つめている。そして少女は何も映すことのない瞳でその場に立ち尽くしていた。

両者の間に漂う沈黙を破ったのはイリスだった。何の前触れもなく、少女が弓を射る姿勢に入ると、そこにあるはずのない弓矢が突如として顕現し、少女はまるで、はじめからそれがそこにあっただかのように自然な動作で目の前の生物に対して弓を射た。少女が放つ弓矢は凄まじい速度でアガシュラめがけて飛んでいく。しかしアガシュラは、その行動を読んでいたかのように横

へ動き、少女の攻撃をかわす。少女は壊れた機械のように何度も何度もアガシュラに向けて弓を放つ。アガシュラにとって少女までの距離は少し遠い距離ではあるがもう数メートルも近づけば間合いに入るところだった。だが入れない。少女はまるで、その間合いをはじめから知っていたかのようにアガシュラを相手の間合いから遠ざけていく。少女とアガシュラ、一方的に繰り出される少女の猛攻撃にアガシュラはワルツを踊る。しかしそれは少女が決めた台本通りに踊るワルツ。そして、少女が要求するワルツのフィナーレはもちろん――。

少女はアガシュラとの距離が一定に達した瞬間、突如として矢を射ることを中断した。それは少女の描く戦闘劇がクライマックスへと差し掛かったことを意味する沈黙だった。アガシュラにとっては少女に近づく最初で最後のチャンスだった。しかし、度重なる猛攻撃でアガシュラはすっかり身を守ることしか考えていなかったのも、突然沈黙した少女に対して取った行動は、次の攻撃に備えて防御態勢を整えることだった。

バルトは自身の持つ戦いの勘からアガシュラが敗北するであろうことを予測していた。弓を構えた少女の右手には、今まで放っていた光り輝く矢を遥かに超える神々しい光が集まり、矢を形成していく。そして一点に狙いを定め……。

「……インフィニティ……ダンス」

機械的にそう告げて放たれたのは、一本の矢。しかしそれは、10や20では足りないほど幾筋もの光を軌跡を描き、アガシュラへと襲いかかった。矢の雨とも言うていいほどの数を、アガシュラは最初の数本を避けるものの、そのおびただしい数の矢を避けきることができずに次々とその体に傷を負っていく。少女の放った光の矢が全て消え去ると、そこには全身を弓矢で貫かれて体中が穴だらけになったアガシュラが呆然と立ち尽くしていた。

少女は微動だにしなくなったアガシュラをその虚ろな瞳に認めた途端、糸の切れた操り人形のようにどさりと地面に倒れ込んだ。

「イ……イリス！ イリス！ 起きてよ！」

ドサリと地面に倒れたイリスへと一目散に駆け出し、イリスを揺さぶるムーウェンだったが、バルトがそれを中断させた。

「ムーウェン、あまり動かすんじゃない。全身が傷だらけで血もたくさん出ている。このまま慎重に町までイリスを運ぼう」

「う……うん、わかった」

二人がベロスへとイリスを運んだ後、ベロスではアガシュラが出現したこの話で持ちきりでした。祖母のマリヌはいずれこうなることを予想していたのか、小さくため息をついた。それからイリスは三日三晩眠り続けました。学校へ行かずにイリスの看病をしようと言って聞かなかったムーウェンも、マリヌやロハンなどの説得によって渋々学校へ行くことになりました。しかし、学校が終わるとすぐにイリスの部屋へ行き、夜遅くまでイリスの看病をしていました。そのおかげもあってか、イリスが倒れてから四日目の夕方にイリスはようやく目を覚ましました。

「う……うん……あ、あれ……ここ……ベッド？」

「イリス！ 気がついたんだね！ イリスうううううわああああん」

「わ、ちょ、ちょっとムーウェン、なに？ なに？ どうしたの？」

ようやく目覚めたことがよほど嬉しかったのか、ムーウェンはイリスが倒れてから一度も流さなかった涙が、せきを切ったように溢れ出てきました。未だに状況が把握出来ていないイリスに、同じく看病していたマリヌは、イリスがアガシュラに襲われて倒れたこと、三日三晩寝ていた事、その間ムーウェンがずっと看病をしてきていた事などを話しました。

「ムーウェン、ありがとう。心配かけちゃってごめんね」

「よかった、よかったよおおおおおお。血だらけだったからもう助からないかもって思っていたんだよう」

「そうだ……私、アガシュラに首筋を食べられて……たくさん血が吹き出して、それから、それから……あれ？ 思い出せない」

「え？ 首から血なんて流れていなかったよ？ それに、イリスは弓でアガシュラをやっつけたんだよ。すごいよ！ あんな弓いったいどこから出したのさ」

よほどすごかったのか、彼は興奮気味にイリスがアガシュラを弓でやっつけた一部始終を本人に話して聞かせました。

「え？ 私、弓なんて持ってないし、アガシュラを私がやっつけたなんて知らないよ？」

二人の会話が噛み合っていないことにいち早く反応したのはムーウェンでもイリスでもなく、同室していたマリヌでした。会話が噛み合わないことに戸惑うムーウェンをよそに、イリスに当時の状況を質問していったマリヌは、イリスにいくつかの質問をしたあと一人納得した様子で部屋を出て行った。

「おばあちゃん、なんだったんだろう」

「うーん、僕にもよく分からないや。でもイリスはまだ怪我が治っていないんだから、安静にしてなきゃいけないんだよ」

「うん、そうだね。怪我が治ったらまた一緒に遊ぼうね！」

「もちろん！」

二人が仲良くおしゃべりをしている間に祖母のマリヌが向かった先は、ロハンの部屋でした。その部屋にはベロスの中でも名のある者たちが集められていました。マリヌ、ロハン、ケベル、バルト……そこに町長も加わってさながら町内の重役会議となんらかわらない状態でした。

「どうやらイリスが……デル族の力に目覚めつつあるようです」

「ふむ……そうか。マリヌばあさんや、やはり運命には抗えぬようですな」

イリスの様子を間近でみていたバルトが町長に報告すると、町長を含め会議の参加者たちは、皆一様にマリヌばあさんへと視線を移した。

「私も孫も、立派なデル族の子。いずれこういう日が来ることは予想しておりました。あとはあの子がペンダントの封印を解けばすべてを理解するでしょう。その時までどうか我が孫をお守り下さらぬか、皆の者」

マリヌは皆からの視線に対し、そう答えました。アガシュラが出たことで、ジエンディア大陸に危機が再び迫っていることは明白でしたが、今はまだイリスが成長するまで自分たちで耐えるしかないと言っていました。

それからのベロスにはアガシュラが出ることもなく、平穏な時間が流れていきました。そして数年が経ち、少女は一人前の成人として認められる年齢になりました。以前仲の良かったムーウェンとも学び舎こそ別になりましたが、変わらずにお互いよく会っていました。いつの間にかムーウェンの後ろにはジョエという精霊がいて、彼と行動を共にしていました。聞けば彼が研究していた巻物を解読した時に呼び出す実験もついでにしてみたところ、本当に精霊の召喚に成功してしまい、そのまま契約する羽目になったのだとか。そんな平和な時間が流れたある秋の日でした。

イリスが秋の景色を楽しむ為に少し寄り道をして、町から離れた場所にいたときのことでした。散策をしてそろそろ帰ろうかと思ったその時、突然身につけていたペンダントが光り始めました。やがて、その光はあたり一面を包みこみ、イリスは光のなかに懐かしい声を聞きました。「イリス——あなたがこの記憶を覗いているということは、あなたは無事に成人して立派に育っているのですね。そして残念なことだけれども、もう私はこの世からいないのですね。でも、どうか嘆かないで。あの時はまだ世界を救える力が私たちには無かったの。だから私たちデル族の生き残りは、少しでも時間を稼ぐために魔王やアガシュラたちに戦いを挑んだわ。結局負けちゃったけどね。だからイリス……私の代わりにどうか世界を、ジエンディア大陸を救って！ おばあちゃんを除くとあなたがおそらくデル族最後の子になるでしょう。お願い……あなたが持つその力で、魔王ビーストを倒して——」

それは、イリスの母親がペンダントに込めた記憶の欠片。その欠片は次々とイリスの頭の中に入っていく、デル族と魔王ビースト率いるアガシュラたちとの戦いの歴史を、彼女は垣間見ることになりました。

辺りを包み込むまばゆい光が収まった後、ペンダントは光を失い二度と輝きを増すことはありませんでした。イリスは自分がデル族だということ。自分には特殊な能力があること。デル族の

使命。そして、デル族に関するありとあらゆる情報をペンダントに込められた記憶の欠片を通して理解しました。それは歴史の歯車がようやく回りだした証。彼女がデル族として自らに課せられた運命を受け入れたとき、彼女の物語はようやく始まりを告げるのでした。彼女は自分がデル族の全てを理解したことを祖母に伝えようとして町へ走って戻りました。しかし彼女が町へ着いたとき、町に漂う違和感に気づくのでした。

Décision

「あれ？ 今日はやけに静かね……あ！ ロハンおじさーん……あれ？ どうしたんですか？
暗い顔して」

「イリス……すまんかった。ばあさんを守りきれなかった」

「え？ どういうこと……ですか？」

「みんな集まっているから自宅に戻ってみなさい」

イリスは祖母に何か良くない事があったのだと理解し、急いで自宅へと戻りました。そして、そこで待っていたものは彼女の想像を絶するものでした。イリスが自宅に戻り、祖母の部屋の前についたとき、ケベルとバルトおじさんがイリスに対して深く頭を下げた。

「すまん、マリ又ばあさんがアガシュラに襲われた。ワシらが異変に気づいたときにはすでに手遅れじゃった」

バルトのその言葉は最後までイリスに届くことはありませんでした。イリスはドアを勢い良く開け放つと、部屋にいるはずの祖母の姿を探し、見つけたときに思わずへたりこんでしまった。

「う……そ……でしょ？ おばあちゃん、ねえ……返事してよ……おばあちゃんてば」

少女のその悲痛な声に反応できる人間は既にこの世に存在していなかった。

「い……いやあああああああああああああああ！」

少女のその叫びは祖母を守れなかった彼らの心に深く突き刺さった。この場にいる誰も、何も少女にかける言葉など持ちあわせてはいなかった。そう、ただ一人を除いては——。

皆が声を出せずにいる中、部屋に近づく足音が一つ。その人物はイリスが今いる部屋に入ってくるなり、イリスに話しかけました。

「イリス……」

「ムーウエン……気休め程度の言葉ならかけないで」

「そんなことを言うつもりなんてないさ。君がデル族だって言うことはロハンおじさんたちから聞いたよ。そしてその使命もね」

イリスはこの状況で一体何を言い出すのかと不思議に思い、ムーウエンを見上げました。そこには幼いながらもひとつの決意を胸に宿した男の子がいました。

「だったら……なんだっていうのよ」

「ぼくと一緒に旅にでないかい？」

「……え？」

「君の使命が魔王ビーストを倒すって言うんなら、僕はその手伝いをしたいんだ」

「本気……なの？」

彼の口から飛び出た言葉はイリスにとってにはわかには信じることが出来ませんでした。それがどんなに辛いことか知った上で彼は、その言葉を口にしている事が表情から読み取ることができたからです。

「じつを言うとね、ジョエと契約したのも半分はこういう時のためだったんだ。君がいずれ旅立つことは聞かされていたからね。まあ、あとの半分は興味本位だったんだけどね」

「でも……そうなったら今度はムーウエンが死んじゃうかもしれない」

「そりゃあそうさ、戦いになればどちらかが負ける。それは仕方がないよ。でもだからって、そんな過酷な運命をイリス一人に背負わせるわけにはいかないよ！」

「……ムーウエン」

「今すぐにとは言わないよ。マリヌおばあちゃんは僕にとってもかけがえのない人だったんだ。それを奪った魔王やアガシュラたちを僕はゼツタイに許さない！ 今すぐにとは言わないよ。だからイリスの答えを……僕は待ってるよ。大切な人の犠牲を少しでも減らしたいと思うのならば、一緒に魔王をやっつけようよイリス」

ムーウエンはそれ以上何も言わずに部屋から出ていきました。そしてそれから半年後——。

La première histoire

「イリス、準備は出来た？」

「もちろん。それじゃあロハンおじさん、バルトおじさん、ケベルおじさん——」

町の入口にはベロスから旅立つ為の準備を終えたムーウェンとイリスがいました。それを見送るのはロハンたちや大勢の町民でした。ケベルは二人のためだけの武器を作り、バルトは二人のためだけの防具を作り上げ、イリスたちに持たせました。

「きみのお母さんのときと同じだな。何も変わっていない。何年経っても俺やケベル……ううん、俺たちは皆デル族の役に立てずにいる」

いつか、少女の母親と交わした会話をバルトは思い出していた。

「いいえ、そんなことはありません。バルトおじさんたちのお陰で私たちはここまで成長することが出来ました。本当に感謝しています」

「そう言ってもらえると多少は救われるよ。君たちを立派に育て上げると君のお母さんに誓ったからな」

バルトはこれまでの少女たちとの思い出に浸りながら別れを惜しみました。

「ケベルおじさんもこの半年間、私たちに稽古をつけていただいてありがとうございました」

少女が魔王を討つと決心してからの半年間は、ムーウェンと共にケベルやバルトの元でひたすら修行に明け暮れていました。

「ああ、しかし実戦と稽古は全く違う。稽古で出来たからって気を抜くなよ」

ケベルは別れが辛くないよう、努めていつものようにイリスを嗜めました。

「はい、わかりました。それと、ロハンおじさんもありがとうございました。私やムーウェンにとって感謝してもしきれないくらい受けたこのご恩は一生忘れません」

「ふ……照れるじゃないか。頑張っけて旅をして色んな仲間を集めてそして、絶対に魔王を倒して生きて帰ってこいよ！」

そしてロハンはこれまでの出来事を振り返り、立派に成長した目の前の少年少女を見て、感慨にふけていました。

「はい！ いってきます！」

ベロスを旅立つ小さな冒険家たちが新たに誕生した瞬間でした。ジエンディア大陸の命運をその小さな肩に乗せ、少女たちはベロスから遠ざかります。この先、どんな困難が待ち受けようとも、彼女たちは決して諦めないでしょう。皆が望み、しかし皆が成し遂げることの出来なかった魔王討伐へと向けて、少女イリスの物語は始まりの鐘を告げるのでした。

もうひとつのイリスストーリー-La première histoire-

<http://p.booklog.jp/book/26877>

著者 : ponza

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ponza/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26877>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26877>